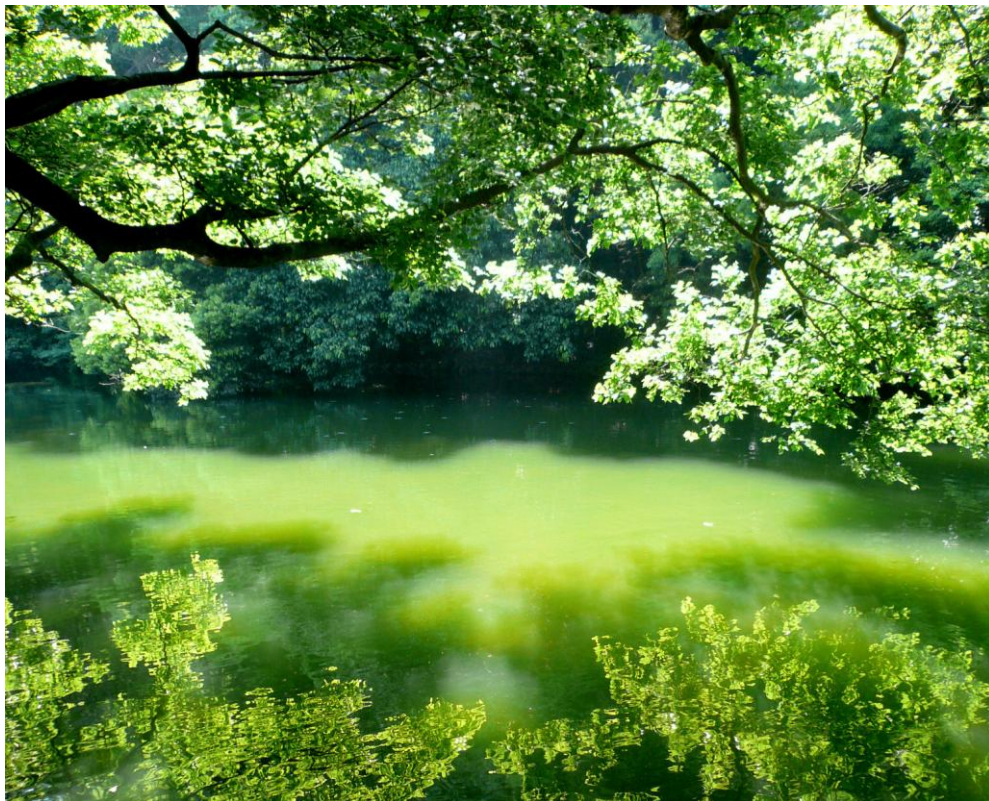


一粒の麦

ニュースレター

Vol.19



主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷 父の家を離れて わたしが示す地に行きなさい。」

(創世記 12 章 1 節)

2014年8月5日

巻頭言

神学生のときの思い出から一月の静修

カトリックさいたま教区 教区管理者
東京教区大司教
ペトロ 岡田 武夫

神学生のときの思い出を記します。

練馬の東京カトリック神学院の旧校舎時代のことです。月の静修の時に、ドミニコ会の司祭、押田成人師が指導に来られました。開口一番、神父さんは言われました。「聖書の初めに何と書いてある？」

唐突な質問に度肝を抜かれて、神学生は誰も返事ができませんでした。神父さんは真っ赤になって怒り、机をたたいて、怒鳴りました。「神学生なのに誰もわからないのか！今までに聖土曜日の典礼に何度も参加しているではないか！」そのすさまじい剣幕に神学生一同、凍りついたようになりました。それから押田神父さんの話がどう展開したのか、一向思い出せません。

毎年、復活徹夜祭を迎えるたびに押田神父さんの怒声を思い出します。

そう、その答えは、復活徹夜祭の第一朗読の冒頭の部分です。

「初めに、神は天と地を創造された。」(創世記 1・1)

神は六日目に人間を創造しました。そして次のように告げられています。

「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めてよかった。」(創世記 1・31)

しかし、この世界に、不条理なこと、種々の悪が存在していることは否定できません。わたしたちを悩ませる問題は多々ありますが、それを一言で言い表すとすれば「悪の存在」ということではないでしょうか。災害、病気、障害、戦争、紛争、飢餓、貧困などの明らかな社会悪だけでなく、人間には罪という悪が存在しています。それはまさに「混沌と闇」という状態です。

実は創世記第 1 章のはじめを読んでもみると、「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」(創世記 1・2)となっているのです。

世界はそもそも、混沌と闇の状態でした。その世界に神の霊が働き、次第に闇が消滅し、秩序が確立されて行くのです。神の創造の業が完成しますと、神のお望みの世界が出現します。

キリストの復活によって贖われた世界は、完全な世界、神の美しさの反映である世界です。それはヨハネの黙示録が告げる「新しい天と新しい地」(黙示 21・1)に他なりません。

この世界と宇宙を創造された神は、常に創造のみわざを続けられ、やがて、この世界を完成してください。それは、闇と混沌のない世界、神の支配が完成した世界です。

あの豪傑の押田神父さんが主のもとへ召されて何年でしょうか。

神学生より皆様へ感謝をこめて

出会いこそ学び

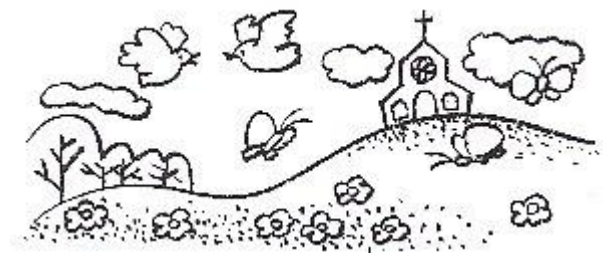
神学科 2 年 ペトロ 高瀬 典之

私は、今年の 3 月 14 日に朗読奉仕者に選任され、神学科 2 年生になりました。早いもので神学校の 6 年の過程のうち 4 年目を迎え、神学校の養成も半ばを過ぎました。ここまで召命の道を歩いてくることができたこと、そして、今年も皆様に元気にご報告できることを神様に感謝したいと思います。

私は今年、福岡県の糸島教会という教会で侍者や教会学校の手伝いをしています。司牧実習をしていると思うのは、神学校の中での聖書や典礼や教義についての勉強も大切ですが、実際に現場に出て、多くの人々と出会うことこそが最高の学びの場だということです。なぜなら、人との出会いほど、神様のわざを豊かに感じられることはないからです。

司牧実習を通して、神父様、シスター、青年、子供たちなど、年齢や性別を問わず、様々な方とお会いする機会があります。時には食事をしながら、じっくりお互いのことを語り合うこともありますし、時には、教会の外での 5 分程度の立ち話かもしれません。しかし、良く思い出してみると、どんなに小さな出会いも私にとって必要のないものはありませんでした。どんな小さな出会いも、神様がめぐり合うように導いて下さり、そして、その導きのもとで出会う人々の中にイエス様の姿を想い、そして、会話の中で交わされるその人の何気ないことばの中にも聖霊の働きがあることを思い知らされるからです。もちろん、時には人との出会いや関わりの中で傷つけたり、傷つけられたり、また、別れの悲しみに沈むこともあります。しかし、私は、イエス様に希望をかけ、喜びのうちに前進を続けるならば、必ずイエス様は人と人とを愛のうちに結んでくださると信じています。

今年の夏から、長期休暇の時の滞在先が松が峰教会から川越教会に変わりました。お世話になった人々からいただいたお恵みに感謝しながら、新しい出会いを通して、将来教区の皆さんのために奉仕できるように精進してまいりたいと思います。これからも変わらぬお祈りをよろしく願いいたします。



子どものように

神学科1年 インマヌエル 永島 真実

みなさま、いつも私たち神学生のためにたくさんのお祈りやご支援、励まし、ありがとうございます。私はこの春、哲学科の学びを終え、神学科1年生となりました。福岡キャンパスの落ち着いた環境の中、祈りやヘブライ語、倫理神学、秘跡論、キリスト論、マタイ福音書、詩編など専門的な科目の勉強や、講義の空いた時間には神学生皆でサッカーをしたりと、充実した時間を過ごしております。

また、今年度の宣教司牧実習は久留米にある児童養護施設に行かせていただいています。たくさん子どもたちと関わるなかで、子どもたちから多くの気付きを与えられている気がしています。例えば、私の膝の上に小さい子たちはときどき乗ってきます。また、少し大きい子どもたちは、少し照れくさそうに一緒に遊んでもらおうとしてきます。そんなとき、自分の小さい頃を思い出します。父親に甘えたり母親に甘えたりしていた小さい頃のことです。自分もあの頃はこの子どもたちと同じだったと思う反面、大人になると甘えたり素直に心を開くことが難しくなっていることに気がきます。このように、子どもたちとの関わりを通して、自分と神様の関係を思い起こすとハッとさせられます。この子どもたちのように神様に素直に身を委ねているだろうかと反省させられます。かたくなな信仰になってはいないか、独りよがりの信仰になってはいないかと。

「子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(マタイ 18・3)

子どもたちのように謙遜に神さまに 100%自分を委ねる、このことを大切に心に留め、召命の道を一歩ずつ歩んでまいりたいと思います。

3センチの神父

哲学科1年 ホルヘ・マヌエル・マシアス・ラミレス

「主よ、あなたがわたしを惑わし わたしは惑わされて あなたに捕らえられました」(エレミヤ書20章7節)。これは私の召命の説明をする、最も好きな聖書の言葉です。今年の4月私と共に神学院に入学した神学生は皆良い人ばかりです。ただ、これまでの歩みは様々で、私のように幼児洗礼の方もいる一方で、まだ洗礼を受けて間もない方もおられます。日本は宣教地ですからこれは当然なのかもしれません。これから6年間神様の神秘を深く経験する事となるでしょう。

これまで私は日本語の勉強の為にさいたま、東京、名古屋と、様々な教区に住んでいました。ある司牧実習先の教会のことですが、初めて行った時にびっくりしました。ミサの40分前にお御堂の前で主任司祭はスータンを着て、ニコニコしながら信者さんを待っています。それまで私が会った日本人の司祭と違ったのです。その神父様はフランシスコ教皇の使徒的勧告『福音の喜び』について話をしてくれました。この話の中で面白い表現を学びました。“3センチの神父”です。信者さんは司祭と話をしに司祭館の呼び鈴を鳴らします。しかし司祭は司祭館から出ず、ドアを3センチだけ開けるだけ、つまりほんの少しの時間しか話をしないと言う意味の表現です。

私はイエス様によって心を惑わされた司祭となり、イエス様の生き方を実践していきます。司祭が神様の神秘の経験をするれば、信者さんの心に神様の言葉が伝わります。神学院を出た後も神様との深い関わりをもつことで“24時間の神父”となれます。

フランシスコ教皇は『福音の喜び』の中で次のようなことを言っています。司祭は羊の匂いのする牧者になりなさい。教会は扉を開き、変化を恐れぬ。教会は貧しい人のための、貧しい教会になりなさい。人を裁くのではなく、人を救うために希望を伝えたい。使い捨てられ排除された人々の声になるべき。平和と正義の建設の為に働き、社会の対話を実践しよう。聖霊に満たされて復活の力を信じる福音宣教者になろう。

これから神学院で色々な経験が出来る事を楽しみにしています。さいたま教区の神学生のためにお祈り下さい。

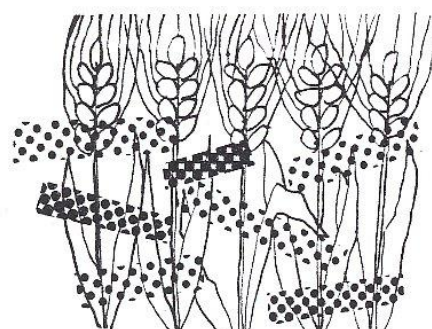
日本での宣教について思うこと

ロニー・ロボカ

聖フランシスコ・ザビエルは「他の異教徒の中に、日本人のような民族は決して現れないだろう」と言いました。この言葉は、日本における宣教の業を考えるのに深い意味を持ちます。私のつたない考えでは、この聖人の不思議な言葉は、日本において福音が受け入れられることは、いかに困難かを表しているのだと思います。

日本における宣教は、メキシコやフィリピンでのように剣の圧力による強制ではなく、宣教師たちの努力にかかっていました。その努力にあたっては、神の位格や三位一体のような哲学的概念の翻訳、また日本人が自然の中に神々を見出すことが、困難として立ちほだかったでしょう。ザビエルはそこで、日本人のための要理書を書き、日本語の用語を用いるように努めました。さらに宣教師たちは、文化的違いにも苦しめられたでしょう。

最初に日本で宣教が始まってから何世紀か経ちました。厳しい禁教令が解かれても、キリスト者が人口の1%を超えることはありません。それでも、神道、仏教に続く3番目の宗教と位置づけられてはいますが、日本で宣教するためには、この社会の課題に心を開いていなければなりません。一つ一つの文化はそれぞれ異なり、貢献し合わなければなりません。福音のメッセージを妥協することなく生き、他の文化を尊重していきたいものです。



信徒の方からの声

神様の不思議

峰教会 五十嵐 良子

主の平安

神学生の皆様、またこの場を通して出会えた皆様、こんにちは。私は栃木県の峰教会に所属しております、五十嵐 良子と申します。今回、神学生の永島さんより原稿依頼のお話をいただき、こうして筆を執る次第となりました。このような機会を与えてくださり感謝いたします。

私は永島さんや、同じく神学生の高瀬さんと10年近く前に、さいたま教区の青年活動で出会いました。「あっちこっちミサ」や「さいたまユースデイ(SYD)」、黙想会や小教区での活動など、振り返ると素敵な思い出がたくさん浮かんできます。

共に歩んできた仲間が、司祭への道を歩み出すと知らせを受けた時は、驚かなかったといえば嘘になりますが、静かな驚きと喜びと申しましょうか。でも一番は、「そういうこともあるのか、一体何があったのかしら」という何とも言えない感覚でした。

私も教会の祈りや青年活動を通して「神様が私に求めていることは一体どんなことだろう」といつも考えますが、神様は一人ひとりに、必要な時に必要なだけ、必要なことや役割を与えてくださっている、と感じます。その人に一番ぴったりの贈り物をくださる。その時は意味が分からなくても後で気付いた時には驚くべき完璧さ！！この神様の不思議にいつも踊らされていますが、なかなか気力と体力がいるもので、もっと鍛えなければと思う今日この頃です！！

今までこうしてたくさんの素敵な出会い、思い出、信仰を深められてきたのも、洗礼を授けてくださり、神様について教えてくださった神父様やシスター、教会の皆様、共に活動してきた仲間たちのお蔭です。そして青年の活動には神学生がいつも快く協力してくださっていること、心から感謝申し上げます。関わってくださった神学生が教区司祭となりご活躍され、関わり続けてくださっていることは、本当に心強く、神様の計らいを身近に感じられ信仰を深めるよいきっかけになっています。召命には色々な形があると思いますが、神様の呼びかけにどのように気付き応えていくのか、これからも機会がある度に分かち合い、教えていただき、日々の生活の中にもっと信仰を根付かせていけるよう、関わりを持ち続けていただけたら幸いです。

皆様、どうぞお体には気を付けて、これからも神様の不思議な業の中で喜びのうちに歩んでいけますように、お祈りしています。

新司祭より

司祭叙階の恵みを受けて

栃木県央ブロック

日光・今市教会 担当司祭

フランシスコ 高橋 史人

皆様お久しぶりです。いかがお過ごしでしょうか。

今年の3月21日、大宮教会で多くの方々のお支えとお祈りの中、司祭叙階のお恵みをいただきました。これまで私を支えてくださった皆様、お祈りを捧げてくださった皆様に感謝しています。

司祭叙階を受けてから大きく変わったことは、やはりミサを執り行うこと、また告解を聞くということです。ミサは人々の祈りの中心ですし、告解は人々の苦しみを聞くことです。司祭でなければ行うことができないこれらの秘跡の重み、受けた権能の重みを強く感じています。また今回は司祭叙階とともに日光教会と今市教会という2つの教会の司牧と、それに付随して日光教会の聖アントニオ幼稚園と今市教会の聖ヨゼフ幼稚園との関わりもあり、様々な新しい出会いのお恵みをいただいています。

小教区にいて日々思うようになったことですが、司祭としてということはもちろん大切なことですが、それ以上に自分は主イエスの前にあって一人のキリスト者に過ぎないということです。そのことをよくよく心に命じておかなければ、信仰者としての方向性が曲がっていくと感じています。

日々与えられる福音の言葉、そして様々な方との関わりを通して、司祭という任務を担いながら、同時に一人のキリスト者として信仰の道をより深めていきたいと思っています。また、これまで皆様から受けたご恩を、これから教会への奉仕というかたちで、お返ししていきたいと思っています。今後ともどうぞよろしく願います。

皆様の上に主イエス・キリストの祝福がよりいっそう豊かにありますようお祈り致します。



「型＝基本」を学んだ6年間

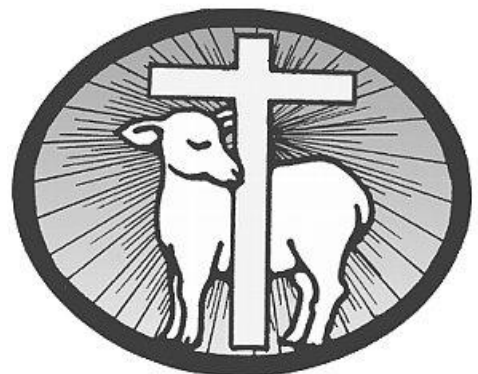
栃木県南ブロック
小山・上三川教会 担当司祭
フランシスコ 山口 一彦

皆様、こんにちは。この春、司祭叙階のお恵みをいただきました山口です。これまでの長期間に及ぶ皆様のご支援とお祈りに、心から感謝しております。本当にありがとうございました。

学生時代、私は一時期、空手に夢中になっていた頃がありました。空手の稽古や試合には、「型」と「組手」があるということをご存知でしょうか。「型」というのは、琉球王国時代の沖縄で少しずつ形成されてきたもので、決められた順番通りに様々な技を繰り出して、その力強さとスピードと美しさを競うものです。「平安(ピンアン)」「観空(カンクウ)」「碎破(サイファ)」など、実に多くの型がありますが、私は当時、この型の練習が大嫌いでした。文字通り「型にハマった」こんな稽古が、実戦でなんの役に立つんだらう、そんなふうに考えていたんです。「組手の極意は型にあり」……組手の時間になると目の色を変えて熱心に稽古する私に、師範が何度も何度も繰り返して言ってくれた言葉です。黒帯を取って後輩の子どもたちを指導するようになって初めて、型を身につけることの重要性に気づきました。

神学校での6年間、この長い研修期間は、司祭として働くために必要な「型＝基本」を心と体に染み込ませるためにあったんだ……今は、つくづく、そう思います。小山教会にも上三川教会にも、外国から移り住んできた多くの信者さんがいます。日本語が十分理解できない中、それぞれに大変な苦勞を抱えている方々の祈りを一つにまとめて捧げる《ミサ》。片言の日本語の中に、どれだけ深い痛悔が込められているか、それを何とか感じ取ろうと全身を耳にして聞く《ゆるしの秘跡》。日本人の信者さんからも、この短い間にどれだけの悩み事を聞いたことでしょう。《病者の塗油》を授けたおばあちゃんは、酸素吸入器で話せない分、目で私に感謝の気持ちを伝えてくれました。どれも、神学校で直接扱うことはできません。しかし、その土台となる知識と心構えは、学ぶことができたと思います。

ようやく、司祭としてのスタートラインに立てました。これからが本番です。これまで支えていただいた皆様に、少しでも恩返しができるよう、頑張っけて参りたいと思います。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。



養成担当者より

命への導き手

養成担当者 御前 ザビエル

「見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせて」¹くださった主なる神は、今の地球をご覧になるならば、悲しくなるに違いありません。温暖化の問題の他、森林の豊かな国で、森林を勝手に不法伐採するからです。スリランカの50人のお坊さんたちは、森を守るために、今年の1月に初めて、森にすむ村人の前で、1000本以上の木々の周りにお坊さんが着るサフラン色の衣を着けました。つまり、木々の「叙階式」を行ったのです。それによって、木々は、仏陀の聖職者団に入り、さらに、木の中に、霊や神々が宿ることになります。木を不法に切る者は、仏様を襲うことになり、また、切られた木に宿っている霊の怒りをまぬかれることができません。

さて、叙階された木は、自分の命が守れることになりましたが、叙階された人間は、いかなる使命を持っているのでしょうか。一言でいうと、「命への導き手」²である主イエスに従って、あらゆる命を守り、豊かに実らせる使命を持っているのではないのでしょうか。

去る5月8日に 毎月一回行われている静修会の講話をするために、練馬区にある神学院東京キャンパスに出かけました。現在、哲学科1年:10名、哲学科2年:5名、助祭:10名の計25名の学生がいます。しばらく、神学生と生活をともにし、何人かの話聞いて感動しました。長崎教区出身で、中学1年からの小神学校を経て、今、大神学校に入っている神学生もいれば、東京教区出身で4年前に受洗して今年の4月から入学した神学生もいます。さまざまな歩みをされた神学生たちは、神の呼びかけに答えて、一生懸命に司祭になる準備をしています。一人ひとりの召命を培ったのは、よく祈る、よくキリストの愛に生きた家族であり、また、燃える心でキリストを中心に生きる教会共同体です。

これからも、さいたま教区において、すべての人の神様から頂いた命が守られ、豊かな実りをもたらすように、一生涯をささげようとする神学生を誕生させる家庭と共同体でありますように願っています。

1. 創世記 2・9 2. 使徒言行録 3・15



スリランカ 不法伐採を防ぐための木の叙階式



感謝と報告

事務局長 終身助祭 矢吹 貞人

さいたま教区司祭を目指す神学生たちの養成のために、いつも祈りと献金による温かいご支援をいただき感謝いたします。お陰さまで、この春もまた、2名の神学生(高橋史人、山口一彦助祭)が大宮教会において司祭叙階の恵みをいただきました(3月21日)。早速、復活祭後から、高橋新司祭は栃木県央ブロック、山口新司祭は栃木県南ブロックへ派遣され、先輩の司牧者の群れに加わって、皆様と一緒によき知らせを述べ伝える日々を生き始められています。

さいたま教区神学生は現在4名、うち2名(神学1年と2年)は福岡キャンパスで、1名が東京キャンパス(哲学1年)で学びの日々を送り、さらに他の1名は、助祭コースに入学するための準備として、南山大学で日本語を学んでおります。

2013年度の「一粒の麦」の会計報告は次の通りです。

会員数:297名(25名の減)

献金総額:6,728,047円(542,218円の減)

一昨年度(2012年度)は、久しぶりに会員数、献金額ともに増となり、心からの感謝でしたが、残念ながら、昨年度(2013年度)はまた漸減となりました。信徒の高齢化が進む中ですが、どうかこれからもお力をお貸しください。所属教会の親しい信徒の方などでまだ入会されていない方がありましたら、ぜひお勧めください。

お寄せいただきました献金は、これまで通り、神学生養成費、神学校分担金などに使わせていただきました。

さいたま教区としては、神学生のさらなる召命はもちろんですが、1日も早い新司教の任命の恵みも皆様と共に祈りたいと思います。

なお、ニュースレターなどが確実に届きますよう、転居・電話番号の変更等がありましたら、ご面倒でも、さいたま教区事務所まで必ずお知らせください。

まだまだ暑い日々が続いております。皆様のご健勝を心からお祈りいたします。皆様の上に神様の豊かな祝福がありますように。

一粒の麦感謝ミサ

日時 2014年9月6日(土)13:00~
場所 カトリック川越教会
司式 岡田 武夫 大司教



発行日 2014年8月5日
発行 カトリックさいたま教区
編集責任者 矢吹貞人
編集 さいたま教区神学生一同
住所 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤 6-4-12
さいたま教区事務所内
TEL 048-831-3150 FAX 048-824-3532

代表 さいたま教区 司教総代理 猪俣 一省神父
振込先 郵便振替口座番号 00180-0-358503
加入者名 「一粒の麦」